

耳たぶを親指で軽くこすられた瞬間、声が勝手に漏れた。耳の奥に熱がこもる。反射的に肩をすくめても、彼の手は逃がさない。

「……耳、だな」

「ちが……っ」

否定したつもりが、声が震えて説得力ゼロだった。さらに、首筋に沿って指先がゆっくり滑る。

「ん……っ、そこ……つくすぐった……」

「くすぐりたいのと気持ちいいの、どっちだ？」

「っ……知らない……!」

答えられないまま、今度は太ももに触られる。スカートの上から

内ももをなぞられると、膝が勝手に寄ってしまう。

「……閉じんなよ」

「む、無理に決まってるでしょっ……!」

声が高くなると、彼はにやりと笑って、さらに指先で円を描いた。そこからじわじわと膝上まで撫で上げられ熱が一気にこみ上げる。

「や、やだ……そこは……っ」

「もう鉄壁とか言えねえな」

耳元で低く囁かれると、背筋がびくと震えた。足先まで熱が走って、呼吸が浅くなる。反撃しようと腕を伸ばすが、その手首を片手で軽く押さえられる。

「今日はお前が訓練される側」

「聞いてない……っ」

「言ってなかった。けど、悪くないだろ？」

そう言うなり柴崎くんはタンスから細いスカーフを取り出した。

「手、貸せ」

「な、なに……っ」

「お前が俺の乳首触れないようにする。俺が崩れる要因をまず潰す。これはお前の訓練だ」

両手首を掴まれ、ベッドのヘッドボードに縛られる。布地は柔らかいのに、少し引くだけで簡単にほどけない結び方。指先が自由じゃ

ない、それだけで全身の力のかかり方が変わる。

「……ずるい」

「そうだよ。俺はお前にだけずるくする」

軽く押されてシーツに仰向けにされる。視界いっぱい背の高い影。肩越しに灯りが遮られ、胸の上に覆いかぶさってくる。

「動くなよ」

低く押さえた声と同時に、うなじに吐息がかかる。ぞわつとした熱が背中を走り、足先までしびれる。耳を軽く噛まれ、首筋を舌がゆつくりとなぞる。焦らすような動きに、くすぐったさと熱が入り混じって、息が浅くなる。

「……ひゃ……っ」

「もう声が上ずってる。まだ始めてもないのに」

太ももの内側に大きな掌が触れる。布越しでも分かる厚みと熱が、肌にゆっくりと移ってくる。

「そこ……だめ……っ」

「だめって言いながら、逃げてない」

彼の下腹部が押し当てられる。布越しでもはっきりと分かる、大きくて重い存在感。

「……これ、入らないって……」

「入るまで慣らす。今日はその訓練」

片手で膝を開かされ、もう片方の手で腰を支えられる。わざと核心を外してゆつくりと擦り合わせられ、そのたびに奥のほうまで熱が流れ込んでくるような錯覚が走る。

「……もう、やだ……」

「やだって言っても、最後までやる」

スカートと下着がするりと抜かれ、何も隔てるものがなくなった。熱を帯びた先端が入り口を探るように触れ、押し広げられる。

「……っ、あ……っ」

「力抜け。ほら、吸って―吐け」

ゆつくりと、大きな塊が中に入ってくる。押し広げられる感覚に息

が詰まり、視界がかすむ。奥まで届くたび、全身がきゅっと縮まって彼を迎え入れてしまう。

「きつ……奥まで届くの分かるか」

「……っ、ん、く、るし……っ」

腰を支えられたまま、深くまで押し込まれて動きを止められる。慣れたところで、ゆっくりと抜きまた深く押し込む。その繰り返しだんだんと速さを増していく。

「……っ、や……あっ……」

「声、抑えろ。じやないと止めてやらない」

彼の動きが一段と深くなる。奥を何度も叩かれるたび、脚の力が抜

け、腰が勝手に揺れる。

「……ダメツ、大きすぎるっ！もう……っ、だめ……っ」

「だめじゃない。ここからだ」

最後のひと突きで、奥まで完全に埋められる。視界が一瞬白くはじけ、体の奥から強く波が押し寄せる。全身が小さく震え、息が乱れるのを感じながら、彼の呼吸も荒くなっていく。

「ううツ……っ、くう……っ」

深く押し込まれまま、彼の体がわずかに震えた。熱が奥に広がっていき、全身が力を失う。腕の拘束をほどかれたとき、指先はまだ震えていた